

## 新雅史「東洋の魔女」論 イースト新書 (2013)

1964年、東京オリンピックのフィナーレは、日紡貝塚という一企業的女子バレーチーム（東洋の魔女）の金メダルが飾り、それを胸に彼女たちは「主婦」へと旅立った。1973年生まれの著書による本書は、バレーボールの生成から、日本における受容、さらに、オリンピックにおける活躍の軌跡により、「企業」－「スポーツ」－「働く女性」という3者の関係を通して戦後における女性労働の一端を教えてくれる。

本書は、まず、バレーボールが、工場とそこに働く人びとと密接に結びついたスポーツであることから解き明かす。バレーボールは、1895年、アメリカのYMCA（キリスト教青年会）がその博愛精神に基づき、工業化に伴い発生した劣悪な環境で働く都市の青少年労働者に対する奉仕（生活改善活動）のためのスポーツとして発明された。この点からも、このスポーツが、労働者の参加による労資の融和を暗黙の目的としていたことがうかがえるが、この含意があるために、アメリカでは、労資といった立場を超えた中立的な立場で、労働者が自主的に組織選択をする上からも、活動の拠点は会社・工場の外の「地域コミュニティ」にあるべきだと考えられた。

一方、日本においては、バレーボールは、戦前から企業において労働者の身体の健全性の確保のための福利施策として導入されたが、この点は戦後にも引き継がれる。敗戦後の混乱期から高度経済成長初期における日本経済の復興は、紡績業をはじめとした繊維産業が牽引したが、その担い手は大量に採用された若年女子工員（「女工」）であった。彼女たちは、郷里の中学校から職業安定所により斡旋された工場に「集団就職」し、「寄宿舎」で暮らしたが、概ね4～5年で離職し音信不通となる人が多数で出ることによって社会問題化したという。企業は、産業の近代性・安全性を喧伝する上からも、福利施策の一つとしてバレーボールの充実を図った。したがって、1950年代のバレーボールは、会社内の工場において労働者が参加し健康の増進を図るレクリエーションと寮、事業所、工場などの対抗戦を通じた各集団の一体感や帰属意識の醸成といった二面が目指された。1960年代に入ると、バレーボールは、従来からの日本の“9人制バレー”から東京オリンピックでの競技種目として国際ルールに則った競技性が高い“6人制バレー”の採用に伴い、「見世物性」と「商品性」を伴う「スペクタクル化」が急速に進み、企業を代表するスポーツへと進展することになる。企業はバレーボールに、企業PRと高まる高校進学意欲のなかで中学卒女性の引き止めを目指す“広告塔”としての役割を期待することになるが、その副産物として、「女工」にも、「有名な“日紡貝塚”で働いている」誇りをもたらしたという。

ところで、企業スポーツの担い手は、自社育成から高校から人材をスカウトする方式へと転換することになるが、企業が、選手を同じ会社（工場）で働く「アマチュア」として遇する点は変わらない。既に世界選手権などで活躍する「東洋の魔女」も、工場で働き、同じ「寄宿舎」で居住するといった塀の中で「共同性」を担保する。このような閉ざされた空間において、「高卒」の選手には、企業の「温情主義」に基づきスポーツを行う選手であるという立場から、深夜に及ぶ厳しい練習に耐え、ときには「生理」といった女性性を保護ではなく鍛錬により乗り越えて働く「模範」となることが求められた。さらに、「模範」としては、働く女性も“適齢期”には家庭に還るといった点にも及ぶ。

このような選手の姿は、企業が望む女性労働観であったといえる。しかしながら、「女工」の低い定着率は、彼女たちの未成熟な職業観にのみ起因した訳ではないだろう。本書においても垣間みえる当時の繊維工業における女性労働は、苛酷で単調な労働、賃金の安さ、景気変動で大きく動揺する雇用、狭隘な「寄宿舎」、限られた自由、就労継続の意志があっても結婚や妊娠、出産といった女性性への配慮ある施策の欠如など多くの課題を抱えていた。それらの改善には、彼女たちと労働組合との地道な取り組みが不可欠であった事実は覚えておく必要があるだろう。なお、「主婦」へと旅立った「東洋の魔女」たちが、その後、“ママさんバレー”の「地域コミュニティ」の普及に貢献した点も興味深い。（井出久章）